近・現代文学に描かれた奈良の相貌

浅田　隆*

一

小稿では奈良と何らかの関係を有する近・現代文学作品をめぐる考察を目的としており、奈良にかかわる文学作品自体の、文学的価値を考察しようとするものではない。

「近・現代文学と奈良」というモチーフは、筆者が奈良大学の教壇に立つようになって以来、次第に醸成されて来たものではあったが、後述のように、テーマ自体の成立の蓋然性に対する疑問もあって、さほど切実なテーマに発展しないまま趣味の域にとどまっていた。

問題を整理する意味もあって、テーマ醸成の背景を簡単に説明しておきたい。

奈良大学の教壇に立つようになった当初、筆者には何故か奈良のイメージと近・現代文学とが不協和音を響かせているように思え、学生の側にも近・現代文学への要求があるにもかかわらずその反応は淡いもので、近・現代文学がかかえている厳しい主張や批評性についても自己の足元の問題としてでなく、どこか稀薄で脆弱な観念的把握にすぎないような印象を受けた。それは自分の未熟さと、学生への過度な要求に起因するものであったが、当時はそのように考えず、「何故」「どうすれば……」等と考え、短絡的ではあるが、一つのことに気付いたのである。それは、古典、特に記紀万葉の風土に完全に圧倒されているということ。日常生活周辺にあふれるそれらの風土を介して身近かに上代文学を享受しているように思えたのであった。風土は単なるきっかけに過ぎない場合もあろうが、作品の舞台、歌われた世界と（幻想にしかすぎない場合もあろう）直接的に接することが出来るということは、やはり感動を強めもしたようである。そして、上代文学と同じような身近かさで近・現代文学を享受させることは出来ないものかとも考えるようになった。今にして思えば、そのような方向で考えようとしたのは、筆者自身が、古典の文学風土に圧倒され、目眩ましを食ってしまったためであろう。

作品の性格にもよるだろうが、本来文学作品は、作品の背景としての地域性・風土性のみならず作者の手からも、それらの追求を意図したものでない限り、独立した自律的世界を有しているはずである。仮りに背景の地域性や風土、あるいは作家といった諸条件の知識や体験なしに享受出来ないような作品があるならば、それはむしろ背景の諸条件に未だ依拠しているという意味で、完成度が低いとさえ言えるに違いない。したがって、近・現代文学が古典、特に上代文学の風土に

* 国文学研究室（昭和61年9月20日受理）

圧倒されているという短絡的解釈は正しいものとは言えないはずである。と、理屈の上では一応考えながら、「奈良・大和と近・現代文学」の結びつきには、何故か特異な様相があるように思えたのである。

奥野健郎氏は『現代文学風土記』（昭51・11　集英社）の中で、

今日の文学者はなぜ東京にばかり集って、このように美しくのどかな地方に住まないのだろうかと不思議になる。風土を忘れたとき文学は衰え、滅びるのだ。とはいえこの大和の風土はあまりに美しくなつかしく、かつ歴史と古典に耕され過ぎていて、ここで新しい文学をつくり出すことは、かえってむつかしい。いや文学者に限らず現在の奈良県人自体が、歴史の重みに圧されてか、観光ずれしているのか、どうもその県民性まではっきりしないようだ。

と記している。「風土」という概念を反東京、つまり中央に対する地方、都市に対する田舎的なものとしてとらえているかの観もあり、東京もまた近・現代文学の風土となっている以上、少々気になりはするが、示唆に富んだ発言であり、筆者が感じた不協和音の説明にもなりそうである。近・現代の作家達は確かに東京に集中しすぎており、結果的に作品の舞台としても東京とその周辺が多くなる。しかしこれは当代の現実的・現代的な人間存在をテーマとして今日的・未来的視点から追求しょうとする近・現代文学においては、東京は日本の近代的・現代的部分の象徴として位置づけられる宿命もしくは固定観念が形成されていると言え、それは仕方のないことでもある。

玉井敬之氏は『奈良県史』第九巻（昭59・6　名著出版）の第六章「概説」で、「近代文学に、奈良・大和が登場するのは、そんなに早いわけではない」と言う。さらに「近代文学は東京を中心とした文学であった。文学を志す者は東京を目指し、そこで勉強した。地方文壇という言葉は、一種の野暮臭さをともなって、中央文壇を志す者の雌伏の場、ついには志を得ず挫折した者の拠り所、の意味がこめられて発せられるようになった」そして、地方が近代文学の場にクローズ・アップするのは写生文と自然主義文学の時代あたりからだというのである。近代文学への地方の登場が玉井氏の指摘のとおりであるにせよ、今日もなお、東京が大きなウェイトを占めていることは否めない。

さて、奥野氏は「この大和の風土はあまりに美しくなつかしく、かつ歴史と古典に耕され過ぎていて、ここで新しい文学をつくり出すことは、かえってむつかしい。」と述べていた。無用の議論の印象もあろうが、なぜ大和・奈良の風土を「あまりに美しくなつかしい」と感じるのだろう。一つには、自然の美しさ穏かさといった天与の風土を挙ることが出来よう。かつてはどこにもあった天与の美しい風土は、社会の合理化・機能主義化の中で崩壊し、喪失したものへのいとおしさが「なつかし」さを感じさせるのかも知れない。また、美しい自然風土を懐かしむ心は、かつて美しい自然風土の中で息づいていた美しい人情をも懐かしんでいるかも知れないのである。も一つには「歴史と古典に耕され過ぎてい」るため、この奈良・大和の風土を見る者は、歴史や古典についての知識から自由とはなり得ず、それらの先入概念から来る一種の「思い入れ」によって現実の奈良・大和を誇大に色揚げしてしまっていることによるだろう。

奈良は古代の都として、特に飛鳥地方や平城宮跡は古代への夢をかき立てる。しかしその奈良は、平安遷都後は、南北朝時代の南朝の地として歴史の表に登場する以外は、京に攻め上る荒法師程度で、当代の激しい時代の波にあまりさらされることもないまま、歴史の裏側で眠り続けて来たかの感が強い。森鷗外は「奈良五十首」（大11・1『明星』）の中で、

蔦かづら絡む築土の崩口（くずくち）の土もかはきていさぎよき奈良

夢の国燃ゆべきものの燃へぬ国木の校倉のとはに建つ国

と歌っている。木の校倉造りの正倉院が千二百年にわたって燃えることもなく建ち続けていることは驚異的で、鷗外でなくとも感動を禁じ得ないが、その一方で、かつて栄えた奈良は築土塀も崩壊し、そこに蔦かづらが絡む荒廃した様相がある。しかし奈良人はそれを惜しむわけでもなく放置し、崩れるにまかせているのである。西条八十の

東大寺の古瓦売る店並ぶ奈良三条に秋の雨降る

といったうら淋しい情緒や、あの新薬師寺南門の敷石の上で「絆纏の男二人」が投銭賭博をしている様を描いた滝井孝作「博打」(昭2・5『大調和』)を想起させもする、荒れた廃都の情緒にもつながるのである。

ところで鷗外の二首をこのように列べてみると、奈良の一つの実相を髣髴させはしないだろうか。かつての栄華は荒廃するにまかせながら、その中になお、かつての栄華に直結するものが連綿と息づいているというように。さらに先の奥野氏の言葉を重ねると、歴史や古典の知識をもって奈良に向う者は、そこに一種の懐しさを抱くということにもなって来よう。

さて、冒頭に十数年来のテーマというような言い方をしながら、奈良の特殊性の解釈や究明をここでしょうとするわけではない。ここでは奈良・大和とかかわる近・現代文学の中に、奈良・大和の相貌を見、そこから、文学の土俵をはみ出すことになるが、その問題点を要約したい。片手間的に目に付いた作品や参考文献を小稿末尾に掲げたが、遺漏も多いことと思われる。

二

当初の、学生達に近・現代文学の風土としての奈良を紹介したいという目的は、羅列的にではあるが可能な程度の材料を集め得た。そして実際に文学散歩と称して歩いてみたりもするが、それは実に平面的趣味的な、そして単なる物知り顔の域を出ず、近・現代文学の中での奈良の位置をトータルな形で把握することが出来ないのである。また、さらに厄介なことには、非文学的側面からの疑問もからみ、奈良という視座からの評価に際して混沌に陥るのである。そして遂には、奈良は近・現代にロマン的幻想（ロマネスク）の素材を提供する場でしかないのではないかという思いを抱きつつある。

奈良の位置をトータルな形で把握出来ないことについては、また別な問題が生じる。それは「奈良・大和と近・現代文学」というテーマの蓋然性についての問題である。つまり、このようなテーマが成立し得るかということである。奈良には「大和学」とか「奈良学」と称する研究が盛んなようである。しかし「奈良学」「大和学」という名において、具体的にどのような対象領域の認識が行われ、どのような研究が行われ、さらにはその学が究極的に何を目指そうとしているのだろうか。ここで言われている「奈良」が、明治二十年に成立した行政単位としての奈良県を指し、「大和」が大化改新によって定められた五畿の筆頭としての地域を指しているとすれば、その学が対象とする地理的な範囲は実に広大であるとともに、現在北倭・中倭・南倭と呼ばれるそれぞれの地域が、自然・歴史・産業・交通・文化等々の点でかなり異った要素を持っている以上、並列的・羅列的に雑多な問題に取り組むことを意図するにとどまるならともかく、そこから統一的な視点に立って何かをつかみ出そうとするなら、その可能性はどこに求められているのか不安である。

同様に、近・現代文学と奈良・大和というテーマについても、奈良・大和と特定することが可能か、必然性があるか不安である。特に文学

が人間の精神構造に深く根差すものである以上、その精神構造を形成していく上での諸条件（自然・歴史・産業・文化・交通等々）に大きく影響されることとなる。藤田佳久氏は『奈良県史』第一巻（昭60・3名著出版）の維新以後の奈良県の成立（明20・11）経緯について触れた中で、中央政府からの一方的な行政の便宜の為に設定された行政区画について、住民は殆んど関心を示さず、明治九（一八七一）年に堺県へ合併吸収され、奈良県の名称が消失した折にも「当時の県民にはほとんど感情らしきものは生じなかった」とのことである。さらに、江戸期の長年にわたるモザイク状の分裂支配に慣らされた住民には「奈良県の成立は大和国の名称変更にすぎず、直接利害の及ばない無縁の存在」でもあったとか。『奈良県史』（一巻六章二節）には森島充子氏作成の大和盆地の所領配置図が掲載されているが、天領や幕府領・藩領だけでなく、他大名領・旗本領・寺社堂上領等がまさにモザイク状に入り組んでおり、歴史的には大化改新以来の大和国でも、住民には大和国への帰属意識が無く、「旧大藩がそのまま移行した県にみられるような『お国意識』が奈良県では弱い」（藤田氏）とのことである。

日本の近・現代文学における奈良という形でテーマを設定しようとするとき、奈良県民の帰属意識（お国意識）など取るに足りないと見るむきもあろう（「お国意識」的なもの自体も、あまり肯定できるものではないが）。しかし近・現代文学の風土としての奈良を見ようとするとき、描かれる側の精神風土が曖昧となり、結果として、奈良を描いた文学の中に、現実的・日常的な生活に即する形でのトータルな奈良像を見つけにくいということにもなって来るのである。

三

1、奈良県出身者の文学

安西冬衛・上司小剣・住井すゑ・兵本善矩・前川佐美雄・前登志夫・保田与重郎・山本勝治・他

2、奈良県居住・寄留・来訪者の文学

会津八一・網野菊・池田小菊・尾崎一雄・小野十三郎・志賀直哉・島村利正・滝井孝作・堀辰雄・森敦・森鷗外・他

右は作家についての分類である。作品の舞台について見るとつぎのようになる。

イ、奈良県が主たる舞台になっている作品

斑鳩物語・役の行者・枯木のある風景・死者の書・大仏開眼・奈良飛鳥園・博打・龍・春の鐘・他

ロ、部分的に奈良が舞台となる作品

風の王国・細雪・自分の穴の中で・天誅組・天平の甍・豊饒の海・流沙・他

また、作品で取り扱われている素材の面から、a歴史的奈良を取り扱った作品（歴史小説）、b現代の奈良を取り扱った作品（現代小説）、c奈良自体を直接に扱うのではなく何らかの形で奈良とかかわりを持つ作品、というような分類も可能だろう。さらに言えば、歴史小説に関し森鷗外が言う「歴史其儘と歴史離れ」（大4・1『心の花』）の問題が生じる。また堀辰雄『曠野』（昭16・12『改造』）や山本勝治「十姉妹」（昭3・5『文芸戦線』）などのように、明らかに奈良に素材を求めながら、作品の舞台としては奈良が登場しない作品、宇野浩二「高天ケ原」（大15・4『改造』）のように実在しない奈良の村を架構した作品もあるわけで、これらも強いて分類すればCに入ることになる。

さて、以下に若干の作品を紹介しておきたい。これらはおおむね右の分類ではイに属するものであるが、筆者の恣意的選択はまぬが

れない。

斑鳩物語

高浜虚子「斑鳩物語」（明40・5『ホトトギス』）は法隆寺界隈の情景を写生文によって描出した、水彩画のおもむきさえ感じさせる好短篇である。彼は明治三八（一九〇五）年の晩秋に京都・奈良を訪れた。その折にふれた法隆寺周辺の情緒がもとになっている。

作品は「余」の眼がとらえた事実・人事・自然を直叙するという形式で、余が対象の背後に主観的に思いをいたす、ということはない。余は官命により何かの取調べの為に京都・奈良を経て、今法隆寺の夢殿の南門前の旅館大黒屋に着いた。奥から急がしげに走り出て来た十七八の娘、お道は手伝いに来ている近所の娘で「色の白い、田舎にしては才はじけた顔立ち」である。お道の案内で中二階の一室に導かれた余は、窓から南に開けた大和の春の風景に接する。

此座敷のすぐ下から菜の花が咲き続いて居る。さうして菜の花許りでは無く其と点接して梨子の棚がある。其梨子も今は花盛りだ。黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は高く浮織りになってゐるやうだ。殊に梨子の花は密生してゐない。其荒い隙間から菜の花の透いて見えるのが際立って美くしい。其に処々麦畑も点在して居る。偶々燈心草を作った水田もある。梨子の花は其等に頓着なく浮織りになって遠く彼方に続いて居る。半里も離れた所にレールの少し高い土手が見える。其土手の向うもこゝと同じ織り物が織られてゐる様だ。法隆寺はなつかしい御寺である。法隆寺の宿はなつかしい宿である。併し其宿の眺望がこんなに善からうとは想像しなかった。余の眼を介して読者もこのなつかしいたたずまいに見とれるのである。余は景色を眺めつつ「東京を出て以来京都、奈良とへめぐって是程心の落つくのを覚えた事は今迄無かった」と思う。余は膝を抱いて再び景色を見る。すぐ下の燈心草の水田で一人の百姓が泥を取っては箕に入れどこかに運ぶのをくり返している。「此広々とした景色の中で人の動いて居るのは只此百姓一人きり」。今日では望むべくもないような長閑な、あたかも法隆寺建立以来の時間の中にゆったりとひたるかの如きものである。お道の説明でこの南に開いた窓から三輪山・多武峰・金剛山・畝傍山を望見する。

翌日、余は午前中法隆寺に行き、午後には法起寺に行く。いずれも官命の取調は簡単に済み、気まぐれから余は小僧の案内で三重塔に登ることになった。案内する小僧がユーモラスで、登りなれた小僧の後から恐々ついて登る余の応対がおもしろく、文体には湿りが無く飄逸である。小窓から三層目の回廊に出た余の眼下には大和の平野の情景がさらに広がっているが、塔の影の中に「一人の僧と一人の娘とが倚り添ふやうにして立話をして居る。女は僧の肩に凭れて泣いて居る。二人の半身は菜の花にかくれて居る」のである。小僧はそれを見降ろしつつ「又来くさったな。又二人で泣いてるな」と言う。それは小僧の兄弟子了然とお道で、昔了然が岡寺に行っていた頃以来の仲ではあるが、了然は思い切りの悪い男とかで、お道が思いこがれているのを知りながらもふんぎりのつかないままに「泣いたり笑ったり」しているというのである。もちろん塔の下の二人の声が届くわけもなく、二人の姿は塔下にせまるゆったりとした大和の風景の一点景にすぎない。たくみな写生である。

その夜、ふと気付くと蛙声の中に機を織る筬（おさ）の音が聞こえ、お道の織り唄も聞こえて来る。「苦労しとげた苦しい息が火吹き竹から洩れて出る」。あたかも会津八一の「いかるがのさとのをとめはよもすがらきぬはたおれりあきちかきかも」（『南京新唱』　大13・12　春陽

堂）を連想させるものがあるが、季節は春である。

しかしこのような物憂気な悠久の俗塵を離れたかのような里の情緒にも日露戦争後の世相がしのび寄り、お道の織る織り賃も宿の「お髪サン」の話では「此頃はあきまへん」のである。夜はお道の筬と唄声のうちにふけて行く。

龍

芥川は猿沢池を舞台に「龍」（大8・9　『中央公論』）を書いた。これは『宇治拾遺物語』巻十一の六「蔵人得業猿沢の池龍事」を踏まえている。芥川の奈良来訪は大正七（一九一八）年六月上旬で、森本修氏によると「江田島の海軍兵学校参観を命じられて」その帰途黒須康之介と法隆寺近くの「電燈が玄関に一つしかなく、座敷はすべてランプという古めかしい」宿に泊っている（『新考、芥川龍之介』　昭46・11　北沢図書出版）が、猿沢池を実見したように思われない。

『今昔物語』の編者に擬せられもした宇治大納言源隆国が往来のものどもを集めて「今は昔の物語」を聞き集めるという想定で、その中の一人陶器造の翁の年若な時分の体験談として語ったのが内容である。芥川はこの「龍」について、マンネリズムという「芸術家としての死に瀕した」（「芸術その他」　大8・11　『新潮』）状態の中で書いたものとして否定的に回想しているが、作品自体は芥川的技巧が十分に発揮されたおもしろ味がある。

「鼻蔵」と異名される鼻の大きな僧・蔵人得業恵印は、日頃自分の鼻を笑いものにする僧俗を「うまく一番かついだ挙句、さんざん笑ひ返してやらう」と考え、猿沢池畔の菜女柳の前に「三月三日この池より龍昇らんずるなり」と建札を打った。これが大変な波紋を呼び、中には池の中に龍の正体を見たと言う者も現われる。恵印は内心笑いながら騒動を見ていた。ところが悪戯の波紋は奈良にとどまらず、摂津・和泉・河内・播磨・山城・近江・丹波にまで広がり、遂には恵印の叔母で尼をしているのが摂津から恵印を頼って見物に出て来、龍見物のお伴まで約束させられてしまった。当日、見物に来た諸国の人々は池畔に満ち「見渡す限り西も東も一面の人の海」となってしまった。恵印は見守る人々を不安に眺めていた。ところが「やがて半日もすぎた時分」「今までのどかに晴れてゐた空が、俄にうす暗く変り」「天を傾けてまつ白にどつと雨が降り出」す。次の瞬間、

稲妻が梭（おさ）のやうに飛びちがふのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引き裂いて、余る勢に池の水を柱の如く捲き起したやうでございましたが、恵印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黒龍が、朦朧として映りました。

芥川は作品の本体（二章）の終りで、語り終えた翁に「これは一体あの建札の悪戯は図星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか」と言わせている。この辺り以下は無い方が緊張感があって良いように思われる。今昔物語の原話は単なる笑い話で龍も出ないままに終るが、芥川はそのような笑話性を排した。吉田精一氏は筑摩書房版『芥川龍之介全集』第二巻（昭39・9）の「解説」の中で「ジャーヤリズムの力が、噂や放言をもととして仮空の真実を創造することを諷したのであろう」と評している。

十姉妹

山本勝治の「十姉妹」（昭3・5　『文芸戦線』）と山本の輪郭については、浦西和彦氏の「山本勝治と『十姉妹』」（昭52・9　『国文学』）によってかなり詳しく知られるようになった。山本は明治

三七（一九〇四）年に橿原市八木町に生まれたプロレタリア文学作家。作品の舞台は奈良と断わられていないが、昭和初期の奈良の農村の現状が素材として取り込まれている。主人公慎作の内面の煩悶を観念走ることのない抑制のきいた筆致で描いた好篇で、浦西氏によると、

祖父と孫との対立、祖父と父との対照的な性格といった登場人物の形象化のたしかさにおいて捕えられ、古い地方農村の家庭の特徴的な性格をリアルにうかびあがらせているところに農民小説として傑出している

ということである。

打ち続く日照りの中で「田面は地図の様な線条が縦横に走って」いた。慎作は農民組合の活動家として仲間と共に地主と対峙しているが、彼は今までの闘志が心の隅にわだかまる澱のため「同志と共に嘆き共に憤っているかの様に装っている」にすぎない。彼の心の内には「暗い一家の現在」がよどんでいる。養蚕の不成功に次ぐこの大旱魃の中で、正直一途な父は「目前の仕事を唯がむしゃらにするより思案が」ない。祖父はかつて「維新当時、区長という大役の下命された名誉」のみにすがって生きる人物。この大旱魃の中で一家の三代の男達の心は全くばらばらの方向を向いている。祖父は慎作の思想に理解を示さず、父はこの二人の板ばさみになりながらも、「愚な親心」も手伝って、農民の指導者たる慎作に弱いながらも共感を持つ。このような折、投機的な十姉妹飼育が流行し始める。「一時天下を風靡した万年青と同じく不可解な魅力をもって、四国を発端にして中国近畿、殊に慎作の故郷付近には、感冒より凄じい伝染力をふる」い始めた。前途に希望を失った人々は一攫千金の夢に走る。「『今に暴落が来る』と嘲笑していた人達が、何時の間にか悪夢の捕虜にな」る始末で、ついに慎作の祖父も鳥を飼うと言い出した。思想的立場から投機性に反対する慎作と祖父との板ばさみとなった父は、翌年の蚕の金を持ち出し、ひそかに賭場に通った結果、元金の上に三〇円の借金まで作ってしまい発狂する。発狂した父は辻に立って、かつて聞きかじった慎作の演説の一節をくり返し叫ぶ。一方、地主側が雇い入れた暴力団白東会メンバーによって、組合員の一人が右腕を失う。この二つの事件によって、沈んでいた慎作の心に再び炎が燃え上がるのである。

浦西氏の調査によって、作中の大旱魃・十姉妹の流行・白東会（白龍会）の刃傷事件などはいずれも昭和二（一九二七）年に奈良県下に発生した事実に材を得たものであることが明らかとなっている。

吉野葛

谷崎は作品集『刺青』（明44・2　籾山書店）に収録された諸編において、肉体の感能美を大胆に表現する作家として華々しく登場したが、関東大震災後関西に移住した頃から、悪魔主義的傾向を払拭し、日本回帰へと変化を見せる。そんな谷崎が昭和五（一九三〇）年秋吉野を訪れ、尾上六治郎氏の案内で国栖地方を訪い、さらに大谷賢二氏の案内で入の波辺りを歩き「吉野葛」（昭7・1、2　『中央公論』）を得た。作中に見える地名の多くを自らの足で経巡っているのである。

作家である私が南朝の秘話に取材した歴史小説を書こうと考えている折、一高時代の友人で大阪の商家を継いだ津村に招かれる。津村は幼時母と死別し、祖母に育てられたこともあって母の面影を求めている。祖母の死後形見の整理のつもりで土蔵に入る。そこで昔の母宛の手紙を入手する。手紙を頼りに吉野の国栖窪垣内を訪れ、手紙にも記されていた母の姉おりとを探し出す。そこは和紙の里でもある。そして紙すきを手伝いに来ていた娘、母の長姉おえいの孫にあたるお和佐に母の面影を認め、婚約する。

ここには谷崎の永遠の女性を求める思いが込められており、田中励儀氏によれば「お和佐は、母であり狐であり、妻でもあった」（『奈良県史』九巻二章）ということになる。

作品の章立てを見ると、その一自天王（南朝秘史）、その二妹背山（浄瑠璃・妹背山婦女庭訓）、その三初音の鼓（浄瑠璃・義経千本桜四段目道行）、その四狐噲（謡曲）、その五国栖、その六入の波となっている。カッコ内に記したのはそれぞれの章で主として取り扱われている「歴史と古典」（既出奥野氏）である。その四までは私の南朝秘史や津村の母恋い、吉野への道行きで、津村の母の閲歴や現実のお和佐についてはその五以下に語られている。作品冒頭で私の歴史小説の試みとして南朝秘史が語られている。それはかつて「『恋いしくば訪ね来てみよ』の歌に誘われるようにして、小学生の津村は信太の森へ出かける」が、そこは小学生の津村にとって「非日常の地だった」のと同様、「戦に敗れた南朝の遺臣が守る自天王の世界は、北朝に対していわば負の異域で、『私』がその歴史、地理を詳述する時、早くも非日常の世界が浮上し始めていた」（既出田中氏）ということになる。それはさらに、現実の津村が現実の女性お和佐を恋うという形に発展しながら、その物語の展開過程において古典を介在させることで、山深い吉野の里と人は次第に非日常的なロマンの世界に昇華しているのである。

死者の書

折口信夫は大阪の生まれであるが、祖父造酒之介が明日香村の飛鳥坐神社の社家出身で、幼時から何度も奈良を旅しているとともに、幼時、大和小泉に里子に出されたこともあったようだ。折口は歌人釈迢空であるとともに、民俗学的方法を駆使した国文学者として著名であり、その歌人的感性と民俗学の造詣の所産として「死者の書」（昭14・1～3　『日本評論』）は異彩を放っている。奈良に伝わる中条姫伝説と当麻寺の蓮糸曼陀羅の伝承が骨格として取り入れられているが、殆んどは折口の創作にかかっており、日本古来の固有信仰と伝来の仏教の習合が太い横糸となっている。宗教・信仰の問題は古代にあっては生活そのものでもあった。したがって文化の変容とともに、氏族勢力の均衡から統一国家へ移行する時期とも重なって来る。

大仏開眼の頃、藤原家の一の姫・南家の郎女は藤原家の祖霊につかえる「いつき姫」でもあったが、太宰帥でもあった父豊成から土産として「称讃浄土仏摂受経」を贈られ、その千部手写を発願する。その姫はいつか、春秋の彼岸の中日に二上山の頂近くに貴い人の姿を見るようになる。ある年の春の彼岸、あいにくの雨の為、心待ちにしていた貴人・俤人を望むことが出来なかった。それまで深窓に育ち、邸を一歩も出たことの無い姫であるにもかかわらず、いつの間にか二上山の麓の万宝蔵院の女人結界を犯して塔の下にあった。この神かくしに会った姫の肉体から遊離した魂を呼び戻すべく、魂ごいが行われる。ところが、この魂ごいによって、天皇への叛逆者として処刑され二上山頂近くに葬られていた滋賀津彦（大津皇子）の霊も五〇年の眠りから呼びさまされる。かつて彼は処刑の直前、これも藤原家の一の姫であった耳母刀自に思いを寄せたが、彼にとって耳母刀自と南家郎女は同一人と意識され、浄界をけがした咎で物忌みをする姫をおとずれる。彼女は二上山の鞍部に現われる荘厳な俤人が肌もあらわで寒そうにしているのを思い、俤人に着せかける衣を蓮糸で織り上げ、その布に画き上げた絵こそ曼陀羅であった。

「山越しの阿彌陀像」を介し、伝統的な太陽崇拝と仏教が習合する日想観の形象化、滅びゆく氏の語部のこと等々、この作品は民俗学的

な複雑な問題を投げかけており、単純に読みとばすことのできない深みを持ってもいるわけだが、一方では、黒沢幸三氏によると「数奇な生い立ちを持つ折口」の「何よりも己に対する鎮魂の書」（『奈良県史』九巻六章）という側面も持っているようだ。

大和路・曠野

堀辰雄は信州軽井沢を愛する作家として知られているが、一方では奈良を愛してもいた。彼の奈良との関係は、昭和一二（一九三七）年六月に始まる。彼がヨーロッパ文学に傾倒していたことは有名だが、若い頃から王朝女流文学にも関心を持っていた。その関係で京都に来た彼は、その一日、奈良に足をのばす。以来しばしば奈良を訪れ（昭14・5、昭16・10、12、昭18・3、5）、都合六度におよぶ。その間『大和路・信濃路』（昭18・1～8　『婦人公論』）として発表されたエッセイ風の小品「十月」「古墳」「浄瑠璃寺の春」「死者の書」や「曠野」（昭16・12　『改造』）を得た。一六（一九四一）年十月の奈良の旅では毎日婦人のもとに便りを送り、その折の書簡を加除して「十月」を得たのである。作品「曠野」はこの旅の中で構想されたことが、その構想過程も含めて「十月」に記されている。一四（一九三九）年五月には友人神西清と十日ばかり奈良に遊んだのち、一人で当麻あたりまで足をのばしている。この折訪れた飛鳥の古墳（菖蒲池古墳）を一六年十月に再訪し「古墳」を書いた。また一八（一九四三）年三月には婦人を同伴して木曽路から伊賀を経て奈良に入り、浄瑠璃寺へも行った。この折のことを描いたのが「浄瑠璃寺の春」である。同じ年の五月京都に滞在し、一日を桜井の聖林寺十一面観音を見る為にあてている。未だ拝していなかった聖林寺の十一面観音を見る為に、当時交通不便であった桜井の奥にまで、京都からわざわざ足をはこんだ辺りには、和辻哲郎『古寺巡礼』（大7・8～8・1　『思潮』）の影響がうかがわれる。また先に当麻に行ったことを記したが、『大和路・信濃路』に折口信夫の「死者の書」にふれた「死者の書」という対話体の小品を収めていることでもわかるように、折口の作品の舞台を求めるためであったと思われる。折口の作品は一四年の一～三月に発表されており、堀の当麻寺訪問はその一か月後なのである。

さて、堀の奈良に関わるまとまった作品は「曠野」のみで、「十月」によると、彼は「何処か大和の古い村を背景にして Idyll 風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉的な気分を漂わせたい」と考えている。イディルとは「小さき絵」という意味で、万葉的な雰囲気を持った小品という意味である。しかし彼が考えていた作品は遂に完成せず、「曠野」の中世的世界として結実した。彼の古代・万葉的なものへの憧れは西洋憧憬と無縁ではなく、ドイツ詩人リルケの『レクイエム』（鎮魂曲）を介し、「或る日万葉集に読みふけつてゐるうちに一連の挽歌に出逢ひ、ああ此処にもかういふものがあつた」（「古墳」）と思ったことに始まる。そして「死後もなほずつとそこで生前とほとんど同様の生活をいとなむものと考へた原始的な他界信仰」（「十月」）を持っていた古代の人々への憧れとして、奈良は彼の内でほぼギリシャと等価的に認識されることになる。彼は唐招提寺の境内に立って「此処こそは私たちのギリシヤだ」（同右）と考えているのである。このような彼が折口の「死者の書」に関心を抱くのは当然で、聖林寺十一面観音について記された『古寺巡礼』の和辻のことばも、彼にとって切実なものとして受け取られていたに相違ない。

「曠野」の舞台は平安京の西の京六条のほとりに設定されている。『今昔物語』巻三十第四話「中務太輔娘、成近江郡司婢語」をふまえ、「クロオデル好みの聖女とは反対に、自分を与へれば与へるほどいよ

いよはかない境涯に堕ちてゆかねばならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話」（「十月」）である。彼は「十月」の中に、

ゆふがた、浅茅が原のあたりだの、ついぢのくずれから菜畑などの見へたりしてゐる高畑の裏の小径だのをさまよひながら、きのふから念頭を去らなくなつた物語の女のうへを考へつづけてゐた。かうして築土のくずれた小径を、ときどき尾花などかき分けるやうにしてゐると、ふいと自分のまへに女を捜してゐる狩衣すがたの男が立ちあらはれさうな気がしたり、さうかとおもふとまた、どこかから女のかなしげにすすり泣く声がきこへて来るやうな気がして、おもはずぞつとしたりした。

と記している。この時、彼はすでに「曠野」の作中世界をさまよっているのであり、彼にとっての現実の浅茅が原や高畑は、彼の幻視の世界への媒体としての意味しか持っていないのである。

漆胡樽

井上靖は多くの西域小説を書いているが、その嚆矢が「漆胡樽」（昭25・4『新潮』）である。同名の散文詩（昭22・5『文学雑誌』）に「正倉院御物展を観て」と副題されているように、彼は第一回正倉院特別展観（昭21・10・19～11・9）に際し、当時毎日新聞社学芸部副部長として、一般公開に先だつ特別観覧に出席し、そこで「漆胡樽」に出会ったのである。

自社から出しているグラビア雑誌の口絵写真を探す私は展示物の中の「黒漆角型」の一対の器物に興味を感じた。簡単な展示説明以上の具体的知識を得ようとするが誰も詳しいことを知らない。そこで私は紹介されて、変人の考古学者で漆の専門家でもある戸田龍英に会いに行く。戸田は開口一番「隕石ですよ、ありゃ」と言う。宇宙の広大な時空を流れ、ふとした偶然によって地球にたどり着く隕石同様、一つの器物は広大な中国大陸の歴史空間の中を流れ、ふとした偶然によって千年前の正倉院に納まったのだと言うのである。そして、戸田の空想が育んだ「漆胡樽」の流旅が語られる。

ターリム盆地周辺に点在するオアシス地帯に三六国―三六集団が小さな城を作り農耕生活をしていた。紀元前のこと。数年続いた干魃のためオアシスはかれ、一つの集団が水を求めて移動を始めた。三時間もすると砂漠の「上に飛鳥なく下に走獣なしと言われる沙の海の中に居た」。さらに進んだ時、ふりわけに水入れをつけた一頭の駱駝が列から離れ引き返して行った。それは水神を祭る司の青年で、昨夜見た夢にこだわり、龍王がブドウ酒を求めたのではないかと考えたのだ。しかし、元の集落の干上がった川にブドウ酒を注いだ直後若者は凶奴に襲われ、漆胡樽は奪われる。「この樽は若者の祖父が、その娘の一人を二千五百余里離れた干闐国の商人に嫁がせた時、相手から贈られた珍しい品であった。その干闐人は又、曾て彼が河から採取した一個の玉を以てこれを西方の商人から得たということであった」。爾来漆胡樽は血で血をあらう部族・民族の戦いの中で人の運命と共に時空を流れ、漢土にもたらされる。そして第九次遣唐使らによって渡海しかけながらも再々唐土に吹き戻されるのである。誰によってもたらされたかも知れないまま、漆胡樽は「日本帝室の宝庫である奈良正倉院の奥深く包蔵された」。そして一二〇〇年、「敗戦荒亡の日の白いうつろな陽ざし」の中に正倉院の扉は開かれた。

春の鐘

立原正秋は晩年、中年婦人層に人気のあった作家である。中年女性の安定した日常生活の中にふとよぎる空虚さに投じた作家と言えるか

もしれない。その空虚さは意識下に成長し、ふとしたきっかけで日常性の破綻へと発展するような危険性を孕んでいる。彼は青年期以来奈良を愛し、作品に描かれた奈良は、奈良に住む者でさえ気づかなかった美しさを教えてくれもする。奈良とかかわる作品の代表的なものとしては同工異曲の感もあるが『花のいのち』（昭41・10～42・9『婦人生活』）や『春の鐘』（昭52・4・7～53・2・10『日本経済新聞』）を挙げることが出来る。とはいえ、この作品は今までに紹介した作品と比較すると少々読者への迎合性が強く、骨董趣味と物知りぶり、あるいは高尚趣味を演出する思い入れや衒学性が鼻につく場合もあり、通俗性とともに文学的成熟度にもやや疑問が残る。

主人公鳴海六平太は三宅産業が奈良の尼寺興福院の辺りに開館した佐保美術館の館長として東京から単身奈良に来、西大寺のマンションに住んでいる。かつて彼は東京で大学に籍を持っていたが三五才の鳴海は三宅藤一郎の求めに応じ、以来、美術品の蒐集に当たって来た。今四五才、愈々開館準備にかかったこの一年半は東京の家を月に半分あけていた。その間に空閨の寂しさから妻範子は不倫に走る。妻は夫について田舎の奈良に行くことを嫌ったのである。上京した鳴海は偶然に、男とホテルの部屋を出て来た妻に会う。そして居直る範子の態度を見て「足かけ十四年間の夫婦生活と、二人の子までなした家庭が、こんなにも簡単に毀れてしまうとは」という思いを胸に奈良に戻る。ふと思い立った鳴海は以前から親しくしていた信楽の窯元を訪れ、そこで、伊勢松阪に嫁ぎながら一方的に離縁されて戻っていた石本多恵に会う。この多恵と鳴海は、のちに多恵が美術館に勤めることになったこと、多恵が借りたのが偶然鳴海のマンションの他の階であったことなどのため次第に求め合うようになる。二人は互いの背に漂う寂寥感を感じながら休日毎に鳴海の好む奈良の風景の中を歩くようになる。鳴海は「妻を堕落させたのが都会だとすれば、多恵をこれだけきれいな心の女に育てあげたのは、信楽という田舎だろうか」と考えたりするのである。

四

紙幅の関係で意を尽すことはできなかったが、右に紹介した作品をもとに、近・現代文学における奈良の相貌についての私見を述べ、さらに先に記した非文学的問題について言及することにする。

右の作品のうち山本の「十姉妹」以外はいずれもロマンチシズムを漂わせた作品である。奈良にかかわる作品のうちで「十姉妹」系列の現実の奈良の生活を見すえた作品としては、上司小剣「木像」（明43・5・6～7・26『読売新聞』）、兵本善矩「彼女の滞在」（昭3・7『郷土』）「布引」（昭7・6『文芸春秋』）「俗境」（昭9・4『文芸』）その他、住井すゑ「橋のない川」（昭34・1～35・10『部落』、昭36・12、38・3、39・4、45・11、48・11 新潮社）などがありはするが、概して、ロマンチシズムを漂わせた作品が圧倒的である。さらに近年の傾向として、所謂歴史ロマンの盛行が目につく。管見にふれた限りでも、田辺聖子「隼別王子の叛乱」（昭50・7～51・9『歴史と人物』）黒岩重吾『紅蓮の女王』（昭53・6 光文社）『天の川の太陽』（昭54・10 中央公論社）『落日の王子』（昭毛・5 文芸春秋社）斉藤道一『飛鳥の幻』（昭58・2 第三文明社）などが発表されており、さらに今年になって創芸出版から「女帝シリーズ」と銘打って鈴川薫『斑鳩の女帝』・田中富雄『改新の女帝』・近藤精一郎『白鳳の女帝』・橋本哲二『天平の女帝』などいずれも古代史上の人物や伝承をもとにした作品群がある。今までにも奈良とかかわってそのような作品が無かったわけではないが、近年の盛行は、そ

れまでのペースから見て、一種異常とも言えるだろう。

ところで、奈良とかかわる作品の多くがロマンチシズムを漂わせていると言ったが、奈良がそのようなロマンチックな情緒や素材を豊富に持っていることも事実である。先に「奈良五十首」にふれて述べたように、千数百年の時空をくぐりぬけた文化財と風土と遺跡がそのままの形で、あるいは堀辰雄が「浄瑠璃寺の春」の中で言っているような「第二の自然」を形成する形で身近に存在し、我々にそれらを介して、一気に千数百年の時空を駆け登ることが可能であるような錯覚を楽しませてくれもする。またその一方では、廃都のわびしさとして詠嘆的情緒を提供してもくれるのである。

志賀直哉は奈良について、

兎に角、奈良は美しい所だ。自然が美しく、残ってゐる建築も美しい。そして二つが互に溶けあってゐる点は他に比を見ないと云って差支へない。今の奈良は昔の都の一部分に過ぎないが、名画の残欠が美しいやうに美しい。

と評している（「奈良」　昭13・1　『観光の大和』）。が、奈良に住むことを恐れた時期があった。奈良移住（大14・4）直前の「偶感」（大13・1　『女性』）の中で、

最近自分は奈良に行き、暢びりした気分で、此処に一二年住んでもいいと思つたが、住んだ上の気分を考へるとそれが此地の限定された気分以外に却々出にくい気がし、考へものだと思ひ返した。奈良の気分は余りにも完成してゐる。

と言うのである。彼は奈良を嫌っている訳ではない。寧ろ美という面から好んでもいる。しかし「早春の旅」（昭16・1、2、4　『文芸春秋』）では「奈良はいい所だが、男の児を育てるには何か物足らぬものを感じ」たと言い、「土地についた退嬰的気分」（「無題」　昭14・4　『改造』）を問題視している。　『大和百年の歩み―社会・人物編』（昭47・7　大和タイムス社）の中で乾健治氏は奈良の老農中村直三の

その日暮しにかりさえせねばいつも正月気が楽な
麦のおままも働きくえば胸につかえず気が楽な

という「気楽歌」を紹介しているが、志賀が指摘する退嬰性を象徴する歌と言え、この退嬰性が良くも悪くも奈良の情緒に影響していると言えるだろう。しかし、このような奈良も当然のことながら現代社会から孤立して存在し得るわけはなく、昭和三〇年代に始まる日本の高度経済成長の余波は確実に奈良の風土を蚕食しているのである。「古代史のロマンを秘めて眠る大和」（昭52・7　『The奈良・大和路』）として旅人の夢を誘うのだろうが、古代史のロマンはたたずまいを持たない点としての存在になりつつある。

先に紹介した「斑鳩物語」の場合、虚子は決してロマンチシズムを意図したとは言い切れない。そこに描かれているディテールも、法隆寺界隈のたたずまいを写生することによっておのずから得られたもので、大黒屋の中二階や法起寺の三重塔上からの眺めは面として描かれていると言えよう。先に「春の鐘」は奈良に住む者も気付かなかったような奈良の美しさを教えてくれもすると述べたが、立原の作品に見られる奈良の情緒の美は、すでに点でしかなく、散在する点を列挙することによって、それらの点と点を結ぶ線によって囲い込まれた空間（面）が、あたかも情緒的広がりを持っているかの如く架構された作品と言えはすまいか。西大寺のマンションの屋上に初めて上った石本多恵の目に映った風景をつぎのように描いている。

広い眺めだった。マンションのすぐ下には電車の線路がいくつかに岐れていた。

若草山と御蓋山の麓に、東大寺大仏殿の大きな甍、そのすこし右に興福寺五重塔がみえる。そこから右の方に転じると、天理市、山の辺の道があるが、霞んでいてみえない。葛城、当麻のあたりも見えなかった。大仏殿から左の方に目を転じると佐保路が続き、興福院や不退寺を包んでいる森がみえる。（中略）不退寺から法華寺を経て秋篠寺の森まできて、さらに左に行くと、マンションのすぐ下に西大寺の甍があり、はるか彼方には生駒山脈がつらなっている。実に美しく広い眺めである。そして描かれた内容には嘘がない。小説である以上嘘があってもかまわないが嘘は描かれていない。しかし確実に虚構は行われている。眼下の西大寺駅周辺は、雑然として生活臭が漂っている点では県下有数の地である。しかしながら、右の西大寺からそのような印象は出て来ない。外から取りまいている著名な古刹や山を列挙することで、あたかも西大寺自体が外から取りまくそれらに連なる面として存在するかのような錯覚を読者に与えるわけで、奈良の情緒を美的に描こうとした立原の手並みと言えるだろう。

芥川龍之介は自分の歴史小説の意図について「澄江堂雑記三十一昔」（『梅・馬・鶯』　大15・12　新潮社）の中で「今私が或るテエマを捉へてそれを小説に書」こうとして「異常な事件が必要と」なった際「不自然の障碍を避ける為に舞台を昔に求めたので」あって「所謂歴史小説とはどんな意味においても『昔』の再現を目的にしてゐないと云ふ点で区別を立てる事が出来るかも知れない」と言っているように、「龍」にあっては、芥川にとって、奈良や猿沢池や中世は便宜のための舞台でしかなかった。さらに『宇治拾遺物語』の原話では龍は遂に天に昇らないままに終る。既述のように彼は猿沢池を実見してはいないようである。彼の方法として原話を変更し異常を生じさせるのに「不自然の障碍を避ける」べく昔に設定したとはいえ、彼にとって奈良はそのような神秘性や超常性にふさわしい所と印象されていたのかも知れない。

すでに作品紹介の中でも簡単にふれておいたように、この「龍」の作品傾向は、「斑鳩物語」や「十姉妹」以外の作品に共通する。つまり、作者のテーマを実現するにふさわしいロマンチックな素材を提供してくれる場として、現実の実相から、作品完成に都合の良い部分のみを切り取って奈良は作中に取り入れられるのである。逆に言えば、情緒に不都合な部分は切り捨てられるということである。「斑鳩物語」はある意味で、文化財と人と自然とが調和的に存在し得た幸福な時代の作品である。しかし大正期の「奈良五十首」には

白毫の寺かがやかし癡人（しれびと）の買ひていにける塔の礎

別荘の南大門の東西に立つを憎むは狭しわが胸

と、成金趣味の魔手が迫っているのである。

井上靖の作品も、奈良を描くことを意図していない。「燃ゆべきものの燃えぬ国」に千年以上の歳月にわたって保存されていた漆胡樽を介して壮大なロマンを展開したが、それは唐招提寺の鑑真渡来を描いた『天平の甍』（昭22・3～8　『中央公論』）にも通じる。そして歴史の舞台はテーマ実現の手段にすぎず、歴史の再現は意図されていないのである。井上は『わが文学の軌跡』（昭52・4　中央公論社）の中で辻邦生の「井上さんは歴史のなかにあるロマネスクなものをつかまれた」という言葉を肯定し、また「歴史小説・現代小説というものを、そう意識的に区別はしなかった」とも言う。さらに「『天平の甍』の登場人物」（『歴史小説の周囲』　昭48・1　講談社）の中で作中人物の造形の意図を語っており、栄叡・普照だけでなく、玄朗・戒融・業行といった人物についても、そこに託されているのは現代社会に生きる現代人の心なのである。「漆胡樽」も例外ではない。山本

健吉氏は『日本文学全集66―井上靖集』（昭37・4　新潮社）の「解説」で、「歴史の盲目的な意志」に奔弄される器物は「一つの『小さな真実』を秘めて」おり、それは「井上氏の小説の第一のモチーフである孤独者の心のなかの秘められた真実」に通うものでもある。「資本主義社会の仕組みが今日のように複雑になると、人は一つの意志、一つの目的を持たなくても、嫌応なく行為の歯車のなかに巻き込まれなければならなくなる」「人は倒れることを欲しないならば、メカニズムの動きとともに間断なく行為しなければならなぬ。芸術家や科学者でも、それは同様である。思考停止、判断停止がそこに要請される」と言う。

高度に複雑化した現代社会の中で、人はその社会の単なる構成要素と化し、メカニズムの中に組み込まれ押し流される。しかし流されながらも、一人一人の心の内には他人と共有し得ない真実が秘められてもいるのである。機械化・機能化を求めて止まない現代社会の中で、集団に解体しきることの出来ない自己の真実を抱き、押し流されることのない世界に憧れる。しかし憧れが単なる憧れにすぎないことも知っており、人は寂寥感を漂わせながらもメカニズムの中で行為をくり返すのである。現代社会はそれ自体の構造と論理を持っているはずなのではあるが、あまりに巨大化し複雑である為、社会は一個の巨大な不条理として把握されることにもなる。何が悪で何が善か、誰が良くて誰が悪いか、何が原因で何が結果なのか、すべては混沌としている。少々飛躍するようではあるが、人が母の胎内への回帰願望を持つのも、不条理の中にぽつんと投げ出される以前の、自分が自分として完全に庇護されてあった幸福な時代への憧れである。同様に、人はまたそれが幻想でしかないことを知りながら「ふるさと」という言葉に憧れる。ふるさと自体もまた現代の不条理に飲まれているにもかかわらず、まるでそこだけが人間を人間として、個人を個人として認めてくれ温かく包み込んでくれる永遠の場であるような幻想を抱くのである。奈良を舞台として取り込んだ作品に見られるロマンチシズムは、結局のところ、このようなものではないか。図式的ながら、奈良には社会が近代化する中で喪失した前近代的世界が息づいているかのような幻想（錯覚）を可能にするような素材が散在するからであろう。そして社会の不条理の肥大に比例して、日本のふるさと奈良も肥大する。

通俗性の濃い『春の鐘』を先に紹介したのは、この作品が最も図式的に右のような関係を形象化しているように思ったからである。

役の行者は山伏・修験道の始祖として伝説化され、坪内逍遥の『役の行者』（大6・5　玄文社）を引くまでもなく、前鬼・後鬼という鬼を従えていたのは有名である。鬼を従え空を飛び深山に棲む行者、何とも神秘的でロマンチックである。ところが奈良県吉野郡下北山村にあっては、伝承などではなく、これはまごうことのない事実なのである。『中央公論』（昭59・12）に前田良一氏の「千三百年の歴史を持つ〝鬼〟の子孫が死んだ」という記事が載っている。下北山村には前鬼という集落があり、そこには五鬼助・五鬼熊・五鬼童・五鬼上・五鬼継という五家があった。これは役の行者が五人の鬼に「行場を守れ」と命じたためで、吉野大峰修験道の灯を守り続けて来たのである。右の記事は、五家の最後の五鬼助義价（よしとも）氏が死去したことについてのものである。ここでは伝説と現実とがその境界を持たないままに共存しているわけである。吉野には他にも「吉野葛」で谷崎がふれたように、南朝末裔自天皇（尊秀王）が非業の死をとげた（一四五七）後にも筋目の衆が朝拝式として自天王をしのび続けていたり、早すぎた倒幕活動天誅組の遺跡が散在する。まさしく井上靖が言うように、そこには「歴史のなかにちゃんとロマネスクがはめ込まれてある」（「わが文

学の軌跡」）と言える。このような隠れ里と古代史ロマンの宝庫を背景に持つ奈良を、『春の鐘』の鳴海と多恵は休日毎に歩くのである。妻範子を東京という現代文明の「都会の埃に染まった」女とし、石本多恵を「信楽という田舎」に育った「きれいな心の女」として対置する。そして「休日に多恵をつれて歩いていると、いつも旅のなかにいる気がした。旅のなかにいるときはすべてを忘れることができた」「二人とも、旅のなかにいるこの時間は楽しかった」と描くのである。

奈良県出身の作家上司小剣・住井すゑ・兵本善矩・山本勝治らには奈良の厳しい現実を直視した作品があり、それ以外の作家の作品には大むねロマンチシズムが流れているというのも、この「旅」ということに関わってくるように思われる。

「旅」にあって、人は日常性のしがらみから暫し脱出し、非日常的時間の中にあって情緒的に自己の回復を試みる。鳴海にとって、奈良は東京が象徴するものに対置される世界である。つまり、現代文明の不条理の象徴として設定された東京に対置され、不条理によって傷ついた心を回復しようとしているかのようである。しかし作者立原はそれが幻想でしかないことも知っている。立原は奈良もまた、現代文明の不条理の中で確実に呼吸していることを知っているのである。だから鳴海や多恵に、奈良における日常性を与えず「二人とも旅のなかにいるこの時間は楽しかった」と描かざるを得ない。人は一生を非日常な旅の中に生きることは出来ない。そして旅の中に居て日常性を拒否し続けようとする者は、不条理の中にからめ取られるのとな別な、違った不確かな生を強いられる。作品のエピローグで、多恵に「いま一年、あなたに従いて行きたいと思います」と言わせ、鳴海に「いま一年生きてみるとしょう」と語らせたのもそのためであろう。

奈良にかかわる近・現代の作品の中の奈良の相貌を見て来たが、そこに見られるのは、多くの場合奈良の日常ではなく、旅人の眼がとらえた情緒性によって登場していた。それは社会が近・現代化する過程で喪失した情緒や人間性への憧れを仮託するもので、情緒的世界は社会が内包する病幣でもある人間の疎外状況から求抜してくれるような幻想を生む。先に、近年、古代史ロマンが多く刊行されていることを言ったが、これも、そのような社会の精神状況に安易に迎合した出版資本の目論見と見ることが出来はすまいか。

すでに大幅に予定の紙幅を越えてしまった。実証性の稀薄な、印象を根拠とした論旨の展開になってしまった。十分な目配りを欠いた発言であることも否めないが、情緒や印象を実証したり論証したりするには無理な枚数でもあった。特に大衆社会状況の中での精神的傾向を以下に要約する立場から問題視しようとする意図があった為、一層混沌としてしまったように思う。

さて、冒頭に「非文学的側面からの疑問」と記したが、このような文学作品に現われた奈良の相貌を介して奈良に住む者の立場から奈良の問題を見るとき、奈良県民自身もまた、旅人がとらえた非日常的情緒を幻視しつつ生活しているように思えてならないのである。奈良県民にとって奈良は日常空間であり現実生活の場であるにもかかわらず――現代文明の不条理は奈良の現実生活の中にも確実に浸透しているにもかかわらず――旅人たちが与えてくれる「思い入れによって色揚げされた奈良像」を実像と錯覚するならば、日常生活の非日常的認識という奇妙な現象を呈することになる。

松本清張は「火の回路」（昭48・6・16～49・10・13『朝日新聞』）の連載終了後、明日香村を舞台に現代小説を書くことの困難さ

を述べている（『火の回路』を終って」　昭49・10・15　『朝日新聞』）。藤田佳久氏もまた、奈良の日常性に山積される問題の深さを指摘（『奈良県史』第一巻「まえがき」）している。岡本太郎氏は『日本再発見』（昭33・9　新潮社）の中で、旅人の美意識を生活者が逆輸入することによって「秋田」の精神風土や民俗・情緒が俗化・悪化したことを鋭く指摘した。紙幅に余裕が無く、各氏の指摘内容にまでふれ得ないのは残念だが、今の段階で真剣に計画的に奈良の情緒を面としての広がりの中で何とかしなければ、やがて文学の世界にロマネスクの素材を提供することも出来ないような本当の荒廃がやって来るように思えてならないのである。

東大寺別当にもなった上司海雲氏は「阿呆によし奈良は田舎」（昭37・5　『文芸春秋』）の中で、奈良の俗化・悪化を痛烈に批判したが、これは、奈良を愛した上司氏の非痛な叫びに聞こえてならないのである。

奈良、近・現代文学目録稿

ア	会津八一	南京新唱、南京余唱、鹿鳴集、渾斎随筆（正・続）
	饗庭篁村	月瀬紀行
	赤江漠	春喪祭
	芥川龍之介	龍
	網野菊	奈良で、見学旅行、雪晴れ、四十年、遠山の雪、大仏万灯会
イ	有本芳水	芳水詩集
	粟田茂	もう一つの風景
	池田小菊	帰る日、奈良、小説の神様、愛と死、松の花、常会の出来事
	石川淳	前賢余韻
	石川達三	自分の穴の中で
	五木寛之	風の王国
	井上靖	河口、流沙、満ちて来る潮、額田王、玉碗記、漆胡樽、天平の甍、桜門
ウ	上原和	斑鳩の白い道のうえに、斑鳩の塔に雲流れて
	内田康夫	明日香の王子
	宇野浩二	高天ケ原、若き日の事、枯野の夢、思い川
エ	エルヴィン・ベルツ	ベルツ日記
	大岡昇平	天誅組、花影
オ	荻原井泉水	芭蕉風景
	尾崎一雄	馬酔木、懶い春、霖雨、秋の終り、あの日この日、春日野のあたり
	大仏次郎	石の言葉、奈良春日野
	小野十三郎	霧の中、奇妙な本棚、火呑む欅、千客万来、大和国原
	折口信夫	死者の書、古代感愛集、くちぶえ、

オ	香具山にのぼりて、飛鳥をおもふ、海山のあひだ、水のうへ、倭をぐな
カ	
加堂秀三	浄瑠璃寺の雨
上司小剣	奈良の大仏、夜の奈良、木像
亀井勝一郎	大和古寺風物誌、飛鳥路、斑鳩の宮、古都、美貌の皇后、吉野山、西の京薬師寺、夢殿の秋
河井酔茗	無弦弓、天の高市、塔影
川田順	伎芸天、吉野朝悲歌、国初聖蹟歌、美貌の皇后、木蘭物語
川端康成	二十歳
河東碧梧桐	大和を歩く、芳野紀行
上林暁	絵馬
キ	
菊地寛	天誅組罷り通る
北原白秋	夢殿、黒桧
北村篤子	あおによし
金達寿	行基の時代
ク	
草野心平	蛙の花、正倉院狩猟文錦壷
邦光史郎	幻の高松塚、幻の法隆寺
黒岩重吾	天翔ける白日、天の川の太陽、紅蓮の女王、日と影の王子、落日の王子
コ	
幸田露伴	楠正成公東大寺の洪鐘を動かせし事、二日物語
小林秀雄	蘇我馬子の墓、初夏、真贋、当麻
五味康祐	柳生武芸帳、喪神
今東光	役僧、みみずく説法、弱法師
近藤精一郎	白鳳の女帝
サ	
西条八十	詩のふるさと、美しき喪失
斎藤茂吉	郡山、白桃、暁紅
坂口安吾	道鐘、飛鳥の幻
阪中正夫	馬

サ	
佐々木信綱	夢殿
佐藤愛子	女優万里子
佐藤惣之助	法隆寺
里見弴	若き日の旅、白い砂土道
佐奈田欣也	金剛山のサムライたち
沢田ふじ子	天平太平記
シ	
志賀直哉	兎、クマ、早春の旅、瑣事、日曜日、奈良三題、池の縁、結解料理、病中夢、蘭斎没後、鬼、犬、淋しき生涯、鵺風、奈良日誌
司馬遼太郎	街道を行く、花神、竜馬が行く
柴田宗徳	天武の翼、大津皇子
島崎藤村	訪西行庵記、人生の風流を懐ふ、眼鏡、春
島村利正	斑鳩ゆき、奈良登大路、宝冠、庭の千草、鮎鷹連想、奈良飛鳥園、北山十八軒戸、青い沼
神西清	雪の宿り、春泥、鵡、万葉遊歩、軽の蓮池
ス	
杉本苑子	西国巡拝記、花の碑文、穢土荘厳
鈴川薫	斑鳩の女帝
薄田泣菫	白羊宮、金剛山の歌、葛城の神、西の京、奈良随筆
住井すゑ	橋のない川、
セ	
瀬戸内晴美	小河漂泊
芹沢光次郎	教祖様
タ	
高浜虚子	斑鳩物語、俳諧一口話
滝井孝作	志賀さんの生活のことなど、室生寺の秋、奈良の春、博打、父来たる、折柴随筆、奈良日記
太宰治	新釈諸国物語
立原正秋	心のふるさと、唐招提寺の月、花のいのち、わが風景と構図、春の鐘、冬の花
田中富雄	改新の女帝
田辺聖子	隼別王子の叛乱

タ	谷崎潤一郎	吉野葛、二月堂の夕、細雪
チ	田山花袋	奈良雨中記、月瀬遊紀、奈良の故郷、南朝の遺跡
	近松秋江	旅こそよけれ
ツ	筒井康隆	筒井順慶
	坪内逍遥	役行者、聖徳太子と悪魔
	津本陽	柳生兵庫助
ト	徳富蘆花	大和路
	富田砕花	時雨の秋篠寺、夕日の西の京
	豊田有恒	持統四年の諜者、英雄ヤマトタケル
ナ	直木三十五	死までを語る、生駒騒動、逢ひに奈良に行く
	中勘助	夢違観音、古国の詩、法華寺
	永井路子	美貌の女帝、氷輪、茜さす、雲と風と、執念の家譜
	中里介山	夢殿、大菩薩峠
	中里恒子	誰袖草、置き文
	長田秀雄	大仏開眼
	長塚節	西遊歌、春泥集、畿内見物
ニ	中山義秀	山のちょろり火、松永弾正
	西脇順三郎	阿修羅王のために、じゅんさいとすずき、大和の道
ノ	野長瀬正夫	十津川、あの日の雲は青かった、山上歌、
ハ	野間宏	大和吉野、故国の詩
	橋本都耶子	青年の環
	橋本哲二	鳴川の道
	奏恒平	萬葉遠足、天平の女帝
	原口統三	三輪山
	半村良	二十歳のエチュード、死人覚え書き
	氷室冴子	妖星伝、鹿の精
ヒ	兵本善矩	ヤマトタケル
		彼女の滞在、物心、布引、蛍の姨、一代果て、
		鯛、俗境

ヒ	広津和郎	大和路、奈良と小出楢重、夢殿礼讃、
		同時代の作家たち、救世観音
フ	藤枝静男	奈良公園幕営、奈良の夏休み、法隆寺と私
	藤川桂介	宇宙皇子
ホ	堀辰雄	大和路、曠野、黒髪山
マ	前登志夫	吉野紀行、子午線の爾、吉野日記、宇宙駅、
		山河慟哭、霊異記
	前川佐美雄	大和まほろばの記、大和、白鳳、天平雲、植樹祭、
		大和六百歌
	前川緑	ふるさと花こよみ・奈良
ミ	正宗白鳥	新薬師寺
	松本清張	火の路、球形の荒野、奈良の旅、奈良の石仏
	三木露風	青き樹かげ、法隆寺、奈良と三笠山
	三島由紀夫	豊饒の海、軽王子と衣通姫、宴のあと
	水上勉	壷坂幻想、わが山河巡礼
	宮本徳蔵	翔ける壷
ム	武者小路実篤	人生と芸術、美術を語る、久米仙人
	村松又一	畑午餐、野夫に歌ふ
	村山知義	忍びの者
モ	森敦	わが青春わが放浪、大和郡山、わが風土記
	森鷗外	奈良五十首、委蛇録
ヤ	安岡章太郎	流離譚
	保田与重郎	奈良てびき、日本の橋、みやらびあはれ、
		英雄と詩人、大和長谷寺
	八尋不二	飛鳥の王の王、卑弥呼の末裔
	山岡荘八	柳生の金魚、春の坂道
	山田美妙	村上義光錦旗風
	山本健吉	大和山河抄、聖徳太子、万葉の旅
	山本勝治	十姉妹

参考文献目録

ヤ
山村美紗　花の寺殺人事件

ユ
結城信一　石榴抄、炎のなごり、炎のほとり

ヨ
与謝野鉄幹　櫛の葉
吉井勇　長谷詣、短歌風土記
吉川英治　宮本武蔵、私本太平記、奈良のかみなり、吉野村別記
吉村遊三　二上山落日

ワ
若山牧水　海の声、別離、独り歌へる、奈良にて
和田勝一　大和の村
和辻哲郎　古寺巡礼、日本古代文化

嘉瀬井整夫　奈良文学散歩　奈良新聞昭53・8・30～昭56・12・27
諸氏　近代文学の中の奈良　月刊奈良昭51・11～昭60・6
駒敏郎　大和路文学散歩　保育社カラーズブックス
北村方志編　文学の旅　千趣会
奥野健男　現代文学風土記　集英社
北村信昭　大和百年の歩み―文学編―　大和タイムス社
滝井孝作編　大和路文学風土記　宝文館
杉浦正一郎編　大和路文学巡礼　天理時報社
志賀直哉他編　現代紀行文学全集　修道社
野田宇太郎編　関西文学散歩　小山書店
黒沢幸三編　奈良県史　第九巻　名著出版
足立巻一　近鉄沿線風物誌文学㈢　近鉄
大谷晃一　関西名作の旅　創元社
岩城準太郎　大和の国文学　天理時報社
井上靖他編　現代日本文学アルバム　学研
中本宏明編　奈良の近代史年表　大阪書籍
藤井辰三　ふるさとの思い出　明治昭和奈良大正写真集　国書刊行会
北村信昭　奈良いまは昔　奈良新聞社

An Arresting Feature about Nara in Modern and Contemporary Japanese Literature

Takashi ASADA

Summary

Why are there so many romantic literary works about Nara? Because the city is famous for her great beauty. People firmly believe that she has ancient history, beautiful scenery, and is full of tender human feeling.

On the other hand, she has grim realities of life. The people there make a living under the influence of her own history, climate and environment, in which exist many critical problems.

In fact, the contemporary writers do not give an accurate description about the city.

This paper contains imtroductory remarks about the city im question.